

「外国語教育」一試論

武田 光史

Terufumi Takeda

はじめに

この数年来、中学生による校内での教師への暴力行為が社会問題となるまで増大し、中曽根首相までが抜本的な教育改革の実行を主張しはじめている。まさに教育の激乱期と言っても過言ではあるまい。かつて全共闘を中心とした学生運動の嵐が全国の大学キャンパスに吹き荒れ高校生にまで波及した時期には、国家権力を行使して封じ込め弾圧しておけばそれで一応の解決となった訳ではあるが、こと問題が義務教育の段階で噴出しているとなれば、ただ力で押さえ込むだけで解決という訳にはいかない。

教師が自らの熱意と連帯でもって独自の授業・教育を展開しようとすると校長はじめ上層部からストップがかけられるようになり、やがて教師はがんじがらめの管理強化で熱意を失ない無気力となりただ与えられた枠——中学にあっては偏差値選別の教育——の中だけでしか動こうとしなくなる。その結果、生徒にとって教師は何ら人間の魅力を感じる存在ではなくなり、勉強以外はあれも禁止これも禁止でむしろ憎悪さえ覚える対象でしかなくなってしまふ。と同時にこの物質的にだけは過剰なまでに豊かになった日本での父親不在の家庭にあっては、躰とか規律とかの道徳など日本の高度成長と反比例するかのようになり崩壊してしまっている。日教組はと言えば、教育問題など二の次とばかりに反自民でやれ社会党系だいや共産党系だとガタガタやっており、その結果、組織率は年々低下するばかりである。

こういった教育状況の中にあつて、人生も半ばを過ぎた一英語教師の言わばレーズン・デートルとしてのささやかながらの教育論を試みても、あながち無意味な事ではなからう。

「外国語教育」をとりまく状況

さてまず最初に、英語教師でありながら表題を「英語教育」とはせず、なぜ「外国語教育」としたかについて述べてみたい。それはつまり、結論から先に言ってしまうと、日本の教育の画一主義——例えば文部省の教科書検定制度というものが、歴史教科書の問題を出すまでもなく、どういう性格のものであるかを考えてみれば明らかであろう——への強い疑念と反発があり、その画一主義に対する問題を日本における外国語教育という一例を取り上げる事により、提起したかったからに外ならない。

中学校より始まる外国語科目の選択は、法的には英語（厳密には現在では米語と言った方が正しいのだが）だけでなくフランス語でもドイツ語その他でも良い事になってはいるが、現実にはほんの僅かの例外を除いて画一的に英語一辺倒というのが実情である。その結果、確かに英語は国際語であるという側面はあるにしろ、毛色の変った人間を見ると日本人には全てがアメリカ人に思え日本という独立国家にありながらすぐにペコペコと反射的に英語で話しかけたがり⁽¹⁾、またヨーロッパであれ東南アジアであれ海外に出た時には英語を話すのがまるで当然であるかの如き態度——実際にはろくに話せもしないのであるが——で接するという⁽²⁾、実に画一主義的で恥ずべき国民性を生み出してしまっているのである。

そこで大胆な提言ではあるが、経済大国でGNPも世界のトップに近いという我が国である以上、まずはNHKの教育テレビで放送している外国語科目の範囲内で各中学校か市町村単位に選択権を与えて外国語を学ばせるというぐらゐの教育的・財政的配慮があつても、しかるべきではなからうか⁽³⁾。

次に冒頭で述べた暴力・非行の問題であるが、現在の教育は何もかも暗記させ頭の中へ詰め込んでその成果を点数で計るというこれまた画一主義の教育——特に中学校においては先に触れた点数によって人間性・人格までが決められかねないという偏差値選別による高校入試のための教育——であり、この問題はそのような教育について行けない生徒の俗に言う「落ちこぼれ」に起因している事は明白であり誰もが言うところである。それではその解決策としてどのような有効な方法があるかについては、中曽根首相が「クラブ活動はじめその他の面での評価もしてやれ」と言うぐらゐで、抜本的な解決策はいまだ見い出されていないのが実情である。また授業について行けないという事は授業内容が多すぎ難しすぎるという事でもあり⁽⁴⁾、この点についてもさらに考えてみたい。そもそも外国語とか中学校でとかに限った事ではなく大学入試が最（災）たるものであると思われるのだが、ほとんどの試験の平均点を50点前後に置くという所に——これは一見してちょうど真中でもあり理想的には思えるが、そこに実は大きな誤りがあるという事なのである。つまりピラミッド型にして平均が50点という事は、大半の者はそれまでの授業が5割程度しか理解出来ず身についてもいないと判断しても良い訳であり⁽⁵⁾、授業内容が半分ほどしか身につけていないようでは全体から考えると本当は理解した事にはなっていないと解釈しても良いのではなからうか⁽⁶⁾。100点満点にしてせめて70点から80点に平均点になるような授業内容と試験にまづは大学入試をも含めて改めるべきなのである⁽⁷⁾。

憂うべき日本の「英語教育」

日本における中学・高校での英語の学習方法は、旧態依然として、文部省検定済の教科書を読む事は簡単にすませ日本語に訳したり文法事項を説明したりするのに時間をかけ、さらに書くという事は日本語でさえ難しいのに英語までも間違いなく書く事が出来るようにというやり方であり、残念ながら、世界での中心的役割を国民一人一人が何らかの形で担わなければならない日本というこの時代にあつて重要な、聞く事も話す事も出来るという教育内容にまでは至っていないのが実情である⁽⁸⁾。しかも真実の所よく考えてみると、先に述べた平均点50点が示しているように、「正しく読んで理解し、書けるようになる」という語学力も中途半端にしか身につけていないという事である。さらに「大学に入学して、日本語はさも分かったらしくできるが、内容を問われると分からないのは、英語学習の根本的訓練を欠き、そして外国語学習の一番大切な目標を忘れているからである。」という英語教員養成に長らく携つて来られた先生が自己反省的に示唆されているように⁽⁹⁾、日本語とは言語体系の異なる外国語を学ぶ場合には特に基礎訓練が重要であるのは言うまでもない事であるが、その学習方法までが根本的に間違っているのである。註釈⁽⁸⁾ 註釈⁽¹⁰⁾ でかなり詳しく触れたように、まともに読解力も作文力も身につけていないのに聞いたり話したりする事が出来ないのは当然の事で、「長い間勉強しているのに、なぜ話せないのだろうか？」などと何も不思議がる事はないのである。その話せない要因はまた、変化しつつはあるが日本は「恥の文化」と言われるように日本人は恥かしがり屋で一人だけでは何も出来ないという国民性にも、根差しているのではあるが⁽¹¹⁾。英語も話せず一人だけでは行動も出来ないというこの二重の理由により、外国旅行といえば団体を組んでゾロゾロと物見遊山の見物旅行であり、経済成長による成り金

を持っての買いあさり旅行となるのである。⁽¹²⁾ 文部省よりの「学習指導要領」を持ち出すまでもなく、外国語学習の目的は外国の文化・事情を知り、外国人との意志疎通・相互理解が出来るようになる事にあるはずであるが、現実にはこの目的とはほど遠い所に日本の英語教育は置かれているのである。⁽¹³⁾

最後にまとめとして結論的に言えば、外国語教育に於てだけではないが中学・高校の段階であれもこれもと盛り沢山な内容を実際には身につくもしないのに教え込もうとするのは労多くして益はなく、必要最小限のエッセンスだけを教えれば十分なのであって、それから後は大学に入ってなり社会に出てなり必要に応じて自ら進んで学べるようにすべきなのである。また外国語教育に関して言えば、国内というウチなる社会において近年来より流行語にさえなっている女性の自立という問題はさておき、国外というソトなる世界に出た時にはサムライ精神⁽¹⁴⁾を蘇らせ一人の日本人として自立した言動が出来るだけの心構えは身につけるよう努めるべきであり、さらに諸外国の姉妹・友好都市との市民レベルでの幅の広い交流をも一層押し進めて行くようにしなければならず、外国語教育はそのためのものでなくてはならない。

〔 註 釈 〕

- (1) 確かにアメリカ合州国は日本とは第一の交友国であり日本人の最も好きな国であり経済的な結び付きも一番強い訳ではあるが、日本人はアメリカ合州国をあまりにも理想化しすぎている嫌がある。現実には、自由と民主主義どころか差別と偏見にあふれたひどくデタラメな所であり、その一端は「ニッポン男児ここにあり——ニューヨーク・LAへの旅——」（『文芸吉備』第二号）を読んでいただければ、おわかりと思う。また“日本人は日本語”と同じ感覚でアメリカ人は誰もが英語を話していると考えるのは早計であり、英語はあくまでアメリカの公用語と言うに過ぎない。例えばニューヨークのチャイナ・タウンでは住民の6割近くがとともに英語がしゃべれないとの事であり（小さな食堂へ入って行った所、Beerという単語さえ通じなかったという実体験まである）、またLAのリトル・トーキョーでは英語など全く使わなくても十分に生活する事が出来、メキシコ系の住民同志はスペイン語だけで話し合っているといった具合である。とにかくアメリカでまともな英語をしゃべっているのはWASPだけと言っても過言ではない。
- (2) 自己反省を込めての個人的体験で恐縮ではあるが、すでに10年以上も前の大阪万博の年の夏での事：フランクフルトのあるレストランに入っていくなり英語で注文をした所、その中年のメイドに流暢な英語でペラペラと「なんでニッポン人はどいつもこいつも英語しかしゃべらないのか？ドイツ語でないと言文を聞いてやらない！」と言われたのであり、また一方パリではしゃべれもしないフランス語で四苦八苦していると「英語が話せないのか？」と逆に催促された次第である。何が言いたいのかと言えば、要は人間同志「こころ」こそが大切なのだという事である。
- (3) 大胆な提言と言ってあるように、経済大国と言いながらークラスの定数さえ欧米並みに減らせせないような状態で、現実にはおいそれと実現可能であるとは思われない訳であるが、ただ英語一辺倒への国民の反省を強く促したいという気持だけは理解していただきたいのである。
- (4) 確かに何であれ教え知らせるという事は悪い事ではないが、近年になってようやく「ゆとりの教育」が叫ばれ出したように、その量があまりにも多すぎる反面十分には身につかず生かされていないのではないのかという疑念があるのである。要は、高校進学も全入に近い時代にあって、何が重要かのエッセンスから初心に戻って出発すべきであろう。

- (5) 試験問題は作りようによっては易しくも難しくも出来るのであり授業内容の理解度とは直接関係ないとも言えようが、ごく一般的には、身につけておかなければならない要点を中心にして授業の成果を試すのが試験であると考えるのが妥当であるならば、このように判断しても誤りではなからう。
- (6) 身近な例で最適ではないかも知れないが、新聞を読む場合、半分は漢字も読めず従って意味もほとんど解らないとしたらどうであろうか?! こういう教育がごく当然であるかの如く堂々とおこなわれているのである。
- (7) もしそうした場合、百点近くかそれ以上の生徒はどうするのかという問題が生じてくる訳であるが、各学期か学年末に学科目別の習熟度による移動クラス制を採用すれば解決が見つのである。但しそうした場合には授業のたびに教室を移動しなければならないという問題点があり空想的であると言われるのであれば、欧米並みのクラス定員とした上で、授業は進行させながら同時に個別の課題を与えてやれば良いのである。
- さらに大学入試に関してであるが、英語に例をとって考えてみると、もし大学の側で原書講読とか論文が書けるだけの実力を必要とするのであれば（珍問・奇問の類は少なくなったとはいえ現にそれだけの語学力を要求する難解な問題が出題されており、その結果、平均点は5割から6割という矛盾があるのであるが）、今なお問題として残されたままの2年間の教養課程において、医学部系の英語とか法学部系の英語とかそれぞれの専門に応じた英文講読なり英作なりの実力を養ってやれば良いのである。
- (8) 言語習得方法は「同じ言葉を繰り返し聞き事により話せるようになり、さらに次の段階で読めるようにも書けるようになる」というのがごく自然な方法ではあるが、公立中学では外国語の授業は週3時間に減らされておりしかもクラスの人数は40人以上であり、現実では不可能なのである。と同時に渡部昇一氏の考えではないけれども、正しく読んで理解し書く事までも出来るならば、読み言葉（書き言葉）と話し言葉（聞き言葉）の違いだけで言語には変りなく、ちょっと慣れるだけで聞いたり話したりする事は簡単に出来るようになるとも言えるのではあるが。
- (9) 片山嘉雄『英語教育試論』（文化評論社、広島市、昭和58年7月）13ページ
- (10) 読む訓練が十分に出来てない故に、単語の発音は不正確でアクセントもどこに置くのか解らず、従って文全体のイントネーションなど有ったものではなく日本語と同じ棒読みであり弁慶ぎなた式の読み方であり、全くと言って良いほど英語になっていないのである。まともに読めないのに英語に対する興味とか関心など湧いて来るはずもなくただ機械的に日本語に置き換える作業をやっているに過ぎず、英語の時間であるのにまるで日本語をノートに書く時間であるかのような傾向さえあり、その結果、英語を日本語には直すかという意味かは理解できないという奇妙な具合になるのである。さらに英作についてであるが、特に大学入試に見られるように文章の専門家でないと書きもしないような長ったらしい日本語とか役に立ちそうにもなく実用性のない表現を英語に直せというのは労多いのみであり、日常会話的で平易な英作をドシドシやらせるべきなのである。
- (11) 日本人の特性については、ささやかながら「『菊と刀』（ルース・ベネディクト）への一試論」（中国短大紀要、第14号）があるので参照されたい。
- (12) とは言え、確かに大学生とかの若い連中は語学研修のための留学とかさらに語学力も身につけてドシドシ外国へ出かけて行くという傾向にはあるが、文化的・人的交流といった面ではいまだ疑問

であろう。

- (13) 「何のための外国語教育なのか？」という問に対して、生徒の側にとってみれば「それは高校入試のためのものであり、さらに大学入試のためのものでしかない。」という所に問題があり、また教師にとって教科書はあくまで手段であり教科書で教えるべきであるはずが、毎年同じように型通りに教科書を教えて時間を過ごすという傾向にも、問題が潜んではいしまいか。
- (14) 時代錯誤の封建主義とか上意下達の儒教精神とかではなく、日本人の魂としてのより良き伝統は失ってはならないのであって、次の機会に「日本人の魂としての武士道」と題しての考えをまとめる予定である。